

明代における『古本大學』顯彰の基盤

—その正當化の方法と後學の狀況—

水野 實

始めに

明代中期以降の『古本大學』（『禮記註疏本大學』）の流行は、一般に言われるように王守仁によってその先鞭がつけられたと見てよいであろう。このテキストは彼の學統の發展と軌を一にして廣まったものであったが、王學とは別の行き方をする學者にも彼の交友關係を通じて廣まっていたからである。湛若水、方獻夫とは守仁が親交を結んだ仲であり、呂柟は若水の友人であった。王道は守仁、若水に従學した學者であり、魏校はその親友で王門とも密な交流があった。

これらの學者はいずれも守仁の『古本大學』（以下テキストとして「古本」と略す）顯彰以降次々にこの採用に踏み切ったものであるが、守仁を含めて彼らが、「古本」に傾斜していったのは何故であろうか。この最たる要因は、朱熹の『大學』解釋、ことにその樞要と見られる「格物致知」（以下「格致」と略す）の解釋に對する不滿と不信にあった。そこで宋以前より傳わる由緒正しいテキスト「古本」に依據することによって、當時官學たる朱熹『大學章句』（以下「章句」と略す）の權威と「補傳」を含む一切の校訂を否定し去ろうとしたのである。このことは同時に自說開陳の道を開くことにもなる。彼らにとって、

「古本」に依據することは必要條件であったと言ってもよい。しかし、ここには大きな障害があった。「古本」は一程を始めとして朱熹によって缺陷本の惡名を着せられていたからである。ここにその「古本」を顯彰するとすれば、當然その惡名を洗ぎ、則るに足るテキストであることを證明する必要があったのではなからうか。『章句』が絶大な權威を誇っていたこの時期においてはなからうか。はなからうか。

一

さて、「古本」の缺陷とはいかなるものであつたらうか。『章句』は「古本」を校訂したもので、この校訂に朱熹の、「古本」の缺陷に對する認識が提示されている。この缺陷は、『大學』の本文を三綱領・八條目を含む一連の文と、各綱領・條目等に對する傳釋に分析し、各綱領・條目がほぼ各傳釋に對應すると見ることから、この本文は本來整合性を持つ構造であつたはずだとする前提から導かれてくる。朱熹はさらに前者を孔子の言（經）、後者を曾子の傳釋（傳）としたが、これは優劣の差を以てみたこととなり、經部の傳釋に對する規制を強化する働きをしたこととなる（二参照）。

以上、朱熹の見方よりする「古本」の缺陷は次のごとくである。

〔一〕「誠意」の「傳」の前に「格致」の「傳」に關する脱文がある。

〔二〕「誠意」と「正心・修身」の「傳」の間に大幅な錯簡がある。

〔三〕「經」の「親民」は「新民」の誤字である。「傳」によって「經を改めたこと」になるが、「傳」は『尙書』の引用で動かし難かつたからであらう。

朱熹はまだいくつかの缺陷を指摘しているが、以上がその大なるものである。朱熹以降様々な校訂の試みがなされたが、大半は朱熹の觀點をもとに、上掲の缺陷を矯正すべく努力したものと云つてよからう。

朱熹見解の最大の難點は、「格致」の「傳」に缺文ありとしたことである。「格致」は客觀的に見ても條目中最初に手を着けるべき工夫と見られるものであるが、「格致」そのものの意味が難解であることから、この傳釋が不明であるとする、解釋の手がかりすら失うことになり、初學者の者にとっては甚だ困惑することになる。しかし、反面自らの思想を付與する十分な餘地を生じることになるわけ、朱熹の「補傳」はここに乘じたものである。が、また一方恣意性の強いものと強く批判を受けたことでもわかるように、何といつても脱文があるのは望しいことではなく、經書としての權威も失いかねない。宋末の董槐、車若水等の「改本」(校訂本。『大學』に限定して以下この呼稱を用いる)はこの點に留意し、脱文という缺陷を錯簡の問題として處理するもので、明代も初期から注目されている。その他に中期にかけて數種の「改本」の出現が確認されるが、これも上記の「改本」と同様、錯簡は認めても「格致」の脱文は回避しようとする校訂であつた。こ

れが明代初期における「改本」の基本的な立場であり、ここにおける「格致」の疑惑解決への情熱は、後述のように「古本」を顯彰した學者にも引き繼がれたと言つてよい。しかし、その分析的把握、整合的校訂という點では朱熹の範疇を出るものではなく、「古本」は彼らによつてさらにその缺陷を追認されていたと言つてよいであらう。このような状況から「古本」はいかにして嫌疑の手を振り解き、正當の地位へ駆け登つていったのであらうか。

二

王守仁は、「古本」の傳統の權威によつてその正當性を主張した印象が強いが、一に示した「古本」の諸問題についていかに對處し、いかにしてその正當性を主張したのであらうか。

守仁が自らの「古本」のテキストによる『大學』解釋を公にすべく、『古本大學傍釋』を刊行したのは、正徳十三年七月のことであつた。彼の解釋は正徳三年の所謂龍場の悟りに端を發するものとするが、彼がそれを披歷したのは同七年歸省の舟中、徐愛に對してで、『傳習錄』徐愛錄中の「大學說」がそれであるとすると(年譜)。しかし、龍場以來ものとすれば、同五年から六年、北京在時には披歷したと考えた方が自然である。『傳習錄』には確實に北京時のものがあり、所錄の説もこの時のものと考えてよい。それにしても公刊に至るまでかなりの歳月が費されたことは苦心のほどを物語るものであらう。

さて、守仁はどのような立場に立つて「古本」を理解しようとしたのであらうか。「大學古本序」の次の言葉がそれを示すものであらう。

舊本析たれて聖人の意亡ぶ。
これは朱熹が經傳に分析して理解したことを強く批判するものであ

るが、これは『章句』批判に止まらず、守仁の「古本」理解の根本的立場を鮮明したものと見てよいと思われる。「聖人の意」^二とまで言うのは、朱熹の方法を拒否するか否かが、彼の理解にとって死活問題だったからである。守仁は朱熹とは正反對とも言える全く別の立場に立った。すなわち連続した一文としてその全體から理解しようとしたのである。この立場は「古本」には元來經傳・分章のなかつたことが支援するものであった。

この立場に立てば、朱熹提出の脱文・錯簡・誤字といった「古本」の缺陷は希薄化するであろう。この缺陷は、分析的理解によるその整合性の缺如から顕在化するものだからである。ことに經傳の區別を取り拂うことは、「經」の優位による「傳」の束縛すなわち「經」の順序に「傳」の順序も従うべし、「格致」の「傳」は「經」の順序に従って「誠意」の「傳」の前になければならないとする拘束から逃れる方法となることは確かであろう。

しかし、守仁はこのよう消極的な意味からのみ「古本」を正當化しようとしたのではなく、彼の立場に立って個々の問題に對しても積極的に對處していた。先ず「格致」の脱文について言うと、「古本」依據を公言した「大學古本序」の冒頭に次のように斷言する。

大學の要は誠意のみ。誠意の功は格物のみ。

この「大學の要」という表現は上述の彼の立場を鮮明に打ち出したものと見られるが、これを「誠意」であると斷ずるのは、本文を一連の文章として扱うとき、「誠意」が最も重要であることを示すように最初にしかも單獨で解説されているからである（他の解釈も可能と思われるが、これについては稿を改めて論ずる）。そして「格物」はこの「誠意」の功夫として意義を認めるもので、「誠意」に取り込み、從屬さ

せて理解した。朱熹のように「格物」を「誠意」に獨立し先行する功夫と見ないことを示すものである。このことを本文把握の面から見れば、「格物」の傳釋は「誠意」の傳釋に含まれるとしても、或いはその後で置かれてもよいことになる。實際はこのような把握を背景にしたのが所引の言であつたらう（因みに現存の『大學古本傳釋』では「誠意」の章の後の所謂「淇澳」の章を「格物」としている）。守仁の宣言は「格致」に對する嫌疑を否定する意味を籠めたものだったのである。

次の「誠意」の章以下の錯簡については、もう言うまでもないことであろう。これは上述の彼の立場に立って整合性にこだわらず融通して理解することで否定することが可能となろうが、この結果「通ず」『傳習錄』中卷答羅整庵少宰書』と見るか否かは主觀性が強く、ここに傳統の權威を強く押し出さざるを得ない事情も出てこよう。

最後に「親民」を「新民」の誤字とする點について述べると、これに對する彼の批判は『傳習錄』の冒頭を飾るもので人のよく知るところである。守仁は先ず朱熹の根據を批判し、

『新民を作す』の新は是れ自ら新にするの民にして『民を新にするに在り』の新と同じからず。『内は『大學』の本文、以下同じ』というが、さらに自ら「親民」を妥當とする根據を、「君子は其の賢を賢とし……其の利を利とす」（所謂「烈文」の章）、「赤子を保つが如し」（齊家・治國の章）、「民の好む所……之を民の父母と謂ふ」（治國・平天下の章）に求め、その正當性を積極的に打ち出している。これも上述の彼の立場を如實に示した解釋であり、説得力もある。「古本」と守仁の學說の顯彰のためにも『傳習錄』の冒頭に置かれたものではなかつたであらうか。

かくして王守仁は、朱熹とは別の立場によってその「古本」に對す

る嫌疑を否定し、その正當性を主張した。この際の本文理解は、「誠意」を高揚し、「誠意」の功夫を「格物」とした實踐論と一體化したものであり、「知行合一説」とも結びつく彼の心學の基盤であった。

しかし、この後「致良知説」が確立され、實踐論の中心は「致知」へ移行する。この立場から「大學古本序」は改定するが矛盾も多く、注釋はついに改めることができなかつた。これは前とは逆で實踐論（致良知）が獨走してしまい、その意義を保證する本文解釋ができなかつたからであり、さらにこれを支える「古本」正當化の基盤も搖ぎかねないことになつてしまつたからである（『大学』本文から「致知」を最重要の功夫とする意味は見出しにくく、また「致知」を前面に押し立てた場合「格致」の嫌疑を否定できなくなろう）。しかし彼は決して「古本」の正當性の御旗を降すことはなかつた。この彼の態度は、この旗の下に後學がその實踐的立場から自由に解釋する道を開くことにもなつたのである。

三 A

王守仁と親交を結び、その「古本」顯彰の影響を直接受けた學者が、湛若水と方獻夫であつた。彼らはいかなる意識のもとに「古本」採用に踏み切つたのであろうか。このことを直接知る手がかりとなる若水の『古本大學測』、獻夫の『大學原』は残念ながら今日すでに散佚したかのである。獻夫については知る手立てがないが、若水については、『測』の序文や當時の書簡から、彼の『古本大學』に對する意識や理解を看取することは不可能ではない。

『測』の成立は、正徳十三年八月（『經義考』卷百五十九）のこととされ、守仁の『傍釋』の刊行に遅れること僅か一ヶ月である。兩者はほ

ぼ同時に「古本」を顯彰した感をもつが、上述のように守仁の態度はこの時期以前に決定しており、若水の學は守仁の強い推奨に應じた結果であつたのである。正徳十年、若水は滋母の死にとまひ、故郷の増城（廣東省）へ歸る途中、守仁と龍江（江西省）で會した際に強く勧められてゐる。この四年後の守仁が若水に宛てた書簡で「向に龍江の舟次に在りて、亦た嘗て其の大學舊本及び格物の諸説を進むるも、兄時に未だ以て然りと爲さず。而れども僕亦た遂に置きて復た強ひて聒（かま）せらざるは、兄の久しからずして、自ら當に此に釋然たるべきを知ればなり。乃ち今果して願ふ所を獲たり。喜躍何ぞ言ふべけん」（『王文成公全書』卷五答甘泉）と言つてゐる。これによれば、龍江會談の時點では若水は、守仁の「格物」説に納得しなかつたのみならず、「古本」を採用することに對しても否定的であつたことが知られるが、さて若水が「古本」を信賴するようになったのはいつ頃であらうか。

「古本大學測序」で「甘泉子、西樵山に讀書し、十三經において、大學古本を得たり」と言うのを信用すれば西樵（廣東省）に移住した後のこととなる。ここで守仁の推奨の事實を無視した表現をするのは、後述のように理解の方法が全く異つていたからであらうか。若水が服喪の後、西樵に赴いたのは、正徳十二年十月七日のことと考えられることから、「古本」の正當性を確信するに至つたのは、ほぼ『測』脱稿同年の正徳十三年としてよいであらう。龍江での守仁の推奨以後すでに三年に近い年月が流れてゐたことになる。守仁の推奨がこれ以前であつた可能性もあり、ことによるとこの倍以上の長い年月を費したことになるかもしれない。

若水は長年「古本」の採用を見送つてきたにもかかわらず、この期になつて顯彰する氣になつたのは何故であらうか。「序」において、

「子の必ず古本を主とするは何ぞや」という問いを設けて次のように答える。

古本は修身を以て格致を申ぶ。其の人を教ふるや、力めて之を身にするなり。之を口耳するには非ざるなり。

ここに言う「古本は修身を以て格致を申ぶ」という發言は、「古本」に對するいかなる理解に基づくものであろうか。直接には理解しにくい表現であるが、『甘泉文集』の中の『測』成立以降の發言にはこれに類する表現が目立つようになる。成立時期の定かなものを擧げると次のごとくである。

〔一〕「大科訓規」(卷六。正徳十五年成立) 大學古本の好處は、全く修身を以て格物致知を釋するに在り。人をして所謂格物は其の理に至るに必ず身もて之に至りて、聞見想像の粗に非ざるを知らしむるのみ。

〔二〕「答陽明王都憲論格物」(卷七。同十六年成立)

(a) 古本の下節において、修身を以て格致を説くは、取る無しと爲す。

(b) 之を古本の下文に考ふるに、修身を以て格致を申ぶるは學者の爲に極めて力有り。

(c) 正に古本の修身を以て格物を申ぶるの旨に合す。

〔三〕「聖學格物通序」(卷十七。嘉靖七年成立) 大學古本は修身と以て格致を釋して、『此れを本を知る。此れを知の至りと謂ふなり』と曰ふ。

以上、「修身を以て格致」を「申ぶ」、「説く」、「釋す」とあるが、言わんとするところは同じであらう。この表現の意味を最も明確に示しているのが、泗州(江蘇省)での「講章」(卷二十)である。

『天子より庶人に至るまで』の一節の末に古本は『此れを本を知る。此れを知の至りと謂ふなり』の二句有り。蓋し修身を以て格物を申べ、格物は乃ち身を以て之に至るの義にして聞見の知に非ざるを見す。

この説明によつて、若水は「古本」に對するいかなる理解のもとに「修身を以て格致を申ぶ(説く、釋す)」と言つたのか、ほぼ了解されるであらう。すなわち彼は次に擧げる『古本大學』の本文を「格致」の申述(解説、傳釋)と見ていたのである。

自天子以至於庶人、壹是皆以修身爲本。其本亂而未治者否矣。其所厚者薄而其所薄者厚、未之有也。此謂知本、此謂知之至也。

若水は、朱熹が「經」の末部として「自天子」以下「未之有也」までの文と、「格致」の「傳」の結文とした「此謂知本(朱熹は衍文とする)、此謂知之至」の二句を一括して「格致」を申述するものと理解していたのである。この「格致」に關する本文把握は、朱熹の發想からしてもあるべき位置にあるもので、朱熹提示の「古本」の最大の缺陷、「格致」の「缺傳」に關する疑惑を否定するものであった。「古本」に對する錯簡や誤字の疑惑について彼がいかに考へていたか判然としないが、上引からしてもこの「格致」の本文把握によつて、彼が「古本」を依據するに足るテキストとしたことは明かである。古本「正當化」においては、いまだ不完全なものと思われるが、この把握が彼の「古本」顯彰の基盤となるものであったことは疑いがない。

またこの把握は「格致」の理解に多少制約を課することになるが、若水を含めた當時の思想界の要求にも答へるものとして理解されることとなつた。すなわち「格致」が「修身」と結びつけて説かれることから、「口耳」による「聞見」の知識を集積することではなく、之を

身にし、「身を以て至る」という所謂體認を説くと解しうるものであった(上例参照)。また彼は次のようにも言う。

大學古本は修身を以て格物を説く。今格物と云ふは、事、理に當るの謂なり。隨處に天理を體認すと云ふの盡すに若かざるなり。

體認は知行を兼ぬるなり。(『甘泉文集』卷七答羅文尉侍御)

若水の「格物説」はその修養の標語として著明な「隨處に天理を體認す」に他ならず、また彼の所謂「知行並進(交進)」でもあったことが了解されよう。これは所引からも知られるように、上述の「格致」の本文把握の上に築かれたものであった。この把握は若水の心學の基盤でもあったのである。

若水は、恐らく當時の状況からして「古本」に依據することが不可缺であることは十分知っていたであろうが、守仁の推獎以降、三年ことによるとその倍以上の年月その採用を見送ることとなった。それはその正當性を保證する守仁の方法に納得しなかつたからであると同時に彼の胸中にある朱熹的發想がそれを拒んだからでもあろう。若水は熟慮の後、その採用に踏み切つたが、これは彼なりの目算が立ったからである。彼がその採用までに費した歲月、この中に「古本」正當化の問題が秘んでいたのである。

三 B

呂柟の『大學』に關する學説は『四書因問』中の『大學』に示されており、『四庫提要』は「古本」の順序に従つたものと紹介している。彼が「古本」を採用したとすれば、「古本」に對する嫌疑をどのよう

うに言う。

物と言うは外に在るものに非ざるなり。皆な此の身に關るのみ。

故に『天子より庶人に至るまで壹是皆な修身を以て本と爲す』。

『其の本亂れて未治まるもの』の若きは『あらず』。蓋し『其の厚くする所のもの薄くして其の薄くする所のもの厚きは未だ之有ざるなり』。誠に此の身を本と爲し、當に厚くすべき所と知らば、則ち心は他に用ひず、世に剩物無く、日に泛事無くして、其の知至る。故に曰く、『此れを本を知ると謂ふ。此れを知の至りと謂ふなり』と。此れを格物致知の説と謂ふなり。

呂柟のこの説明は、上掲(三A)の「自天子」以下「知之至也」までの『大學』の本文に多少言葉を補つて筋を通したものであるが、これは彼が「格致」の本文をいかに把握しているかを示すものでもある。すなわち、彼がまさに「自天子」以下「知之至也」までの本文を「格致」の傳釋として把握していたことを示したものに他ならない。この把握の上に立つて言葉を補つて弟子の問いに答えたものが所引の説明なのである。

この「格致」の本文把握は、言うまでもなく上述の若水の場合と一致するものである。呂柟も若水と同様、「古本」の抱えてきた最大の缺陷を否定する把握がなされており、若水の場合を考えると、これのみで十分採用に値し、顯彰するに足ることになるが、後述するように上引と同様の方法で錯簡や誤字の問題も解決した精密なものである。

所引では、呂柟の「格物」の具體的な意味は判然としないものがあるが、同上書において「格」を「至」と訓じ、「窮至」の意味にとる理解は、朱熹に類する。しかしまた、

其の『修身を本と爲す』と曰ふは、修身即格物と謂ふに非ざるな

り。猶ほ格物するに修身を以て本と爲すと云ふがごとし。泛泛焉として天下の物を窮至して修身に切ならざるが若きは、是れ則ち所謂物馳にして所謂格物に非ざるなり。

と言うように、彼の「格物説」は上掲の把握を基盤として「物」を「身に關る」範圍でとらえ、「天下の物」とする朱熹の理解とこれに従つて知識の收積に汲汲たる當時の風潮を鋭く批判するものであつた。若水とはその本文把握もその訓も同様であつたが、所引の「修身即格物」はその前文からして若水の批判であり、また呂柟はあくまで「先知後行」を主張したことから了解されるように、湛説とは一線を劃するものであつた。(詳細は稿を改めて論ずる)

さて呂柟が上掲の「格致」把握の採用に踏み切つた時期は定かでない、その歿年の嘉靖二十一年以前であるとしかわからない。若水との交流は正徳六年まで遡ることが可能であるが、その後の交流については不明である。が、嘉靖六年、親泉書院においてともに講會する機會があつた(三C参照)。この時、若水はすでに同一の把握を確立しており、呂柟がこれに基づく彼の學説を鋭く批判していること、また「古本」正當化の本文把握は呂柟の方が精密な面を持っている(四参照)ことから、この本文把握は、若水の方を先行するものとし、また若水から呂柟に對する影響を考えてよいであらう。

三 C

上掲の湛若水、呂柟の二人は、王學とは相入れることのなかつた學者であり、それが上掲の「格致」の本文把握にも示されていたが、王學の中に上掲の「格致」把握を支持するものがあつた。意外な感もあるが、それは左派の王良だつたのである。

明代における『古本大學』顯彰の基盤

彼の「語錄」(『重鵠心齋王先生全集』)には次のように言う。

『天子より庶人に至るまで』以下の數句は是れ格物致知の義を釋す。格物の物は即ち『物に本末有り』の物、『其の本亂れて末治よるものはあらず。其の厚くする所のもの薄くして、其の薄くする所のもの厚きは、未だ之有らざるなり』とは、此れ格物なり。故に即ち之に繼ぎて曰く、『此れを本を知ると謂ふ。此れを知の至りと謂ふなり。』

この『大學』本文に基づく「格物」説は、所謂「淮南格物説」の基盤となる見解として人のよく知るところである。「格物」の「物」を、「物に本末有り」の「物」と解した點はひとまずおくとして、「天子より」以下「未だ之有らざるなり」までの本文を「格物」の解釋とし、「此れを本を知ると謂ふ。此れを知の至りと謂ふなり」をその結文とする理解は、まさに上述の若水や呂柟の見解に一致するものであらう。

王良は、湛若水や呂柟等と嘉靖六年に南京の新泉書院で講會している『明儒王心齋先生全集』の「年譜」(この時若水はすでに上掲の「格致」把握を確立していたこと、この折に王學と湛學が一致する旨の「天理良知説」(『全集』卷三)を作成している王良の態度からして、この「格致」把握に關して若水からの影響は十分考えてよいであらう。

また王良が、「淮南格物説」を發明した時期は嘉靖十六年のこととされる(同上、「年譜」)が、彼の學説は湛若水もしくは呂柟と同一の基盤の上に、さらに「物に本末有り」の句を補強して展開されるもので、その發展性に鑑みても、ほぼ妥當な時期であらう。

彼の解釋は「物に本末有り」の句を加えることから、その發想自體、若水や呂柟とは異質のもので、王學的なものである。また當時王

門にあつて「古本」に依據することは自然であつたと考えられ、彼が上掲の「格致」把握によつて「古本」を正當化しようとしたとは思われない。が、しかし王畿にしても「格物」の傳釋を、「誠意」の章の本文「悪臭を惡むが如くし、好色を好むが如くす」に求めた（『王龍溪先生全集』卷六格物問答原旨）ことから知られるように、「古本」に依據する上で「格致」の脱文に對する嫌疑を解消する必要があり、必ずしも朱熹の發想に沿つて「誠意」の章の前になくとも、本文中にその所在を確認することは必要であつたのである。王良の思想は、一般に庶民層へ浸透していったことが力説されるが、知識人、士大夫層にも支持を得たものである。彼の學説は、朱熹的な立場からしても、まことに最適な箇所はその基盤を確保してその上に自説を築きえたものであり、知識人、士大夫層にも説得力を持ち、その支持を取りつける上で大きな役割を果したのではなからうか。

今日残存する資料では明確にし難いが、彼の「格物説」は多くの弟子に祖述され、また家學として繼承されていったであらう。この中で、思想家として一家をなした學者王棟や耿定向等にも確實に受け継がれていった。前者は『明儒王一庵先遺生集』卷一正・續會語に數條、後者は『耿天台先生文集』卷五答唐伯元、卷六格物解に見える。このような繼承の中で注目すべき通念が形成されていった。定向の弟子劉斯原は次のように言う。

近世吉陽の王心齋の大學說、正に此と同じ。學士家之を健羨し、或いは其の聖經の本旨を眞得するを贊し、或いは其の直に無聲無臭中より此の物を觀破するを贊するも、未だ人に隨ひて場を看るを免れず。而も其の正に『管窺古本』中より來るを知らざるなり。（『大學古今本通考』卷六管窺大學古本）

「此れ」とは所引の前文からして上掲の「格致」の本文把握を指すものであるが、この把握が王良獨自のものとなされ、賞賛されていたことを傳えている。斯原は學者連の評判に與せず、その由來を『管窺大學古本』（五參照）にあると主張したが、彼も湛若水や呂柟については全く認識不足であつた。また劉宗周の次のような斷定もこのような通念を反映するものであらう。

修身以上を分ちて格致の傳と爲すものは、心齋王氏其の端を啓く（『劉氏全書』卷三十八章句）

この「格致」の本文把握に關して、「格致」の脱文の嫌疑を否定し、「古本」を正當化する意識を強くもっていた若水や呂柟が無視され、かえつてその意識が希薄であつた王良獨自のものと受けとられる傾向にあつたことは、皮肉なことであるが認めねばなるまい。

三 D

上例の「格致」把握は「淮南格物説」の基盤として王良後學に傳承されていったが、首唱者であつた湛若水の後學における狀況はどうだつたのであらうか。湛門の系譜の中では心學否定論者としてまた『僞石經大學』の顯彰者として名高い唐伯元がかつてこの把握の支持者であつた。彼はまたこの支持者として六人の學者に論及していることから、先ず彼の意見に耳を傾けてみよう。

我が明の高皇帝、侍臣を諭して大學の要は修身に在りて古本は修身を以て格致を釋すと謂ひしより、然る後直に數千載不傳の緒に接す。是れより儒臣蔡虛齋、林次崖、蔣道林、羅文恭、王布衣及び先師呂先生の如き往往能く其の義に通ず。然れども徒に之を解すと曰ふと云ふのみ。其の學の人を教ふる旨存せず。就中破的の

者、布衣に如く無し。……其の相率めて新學に陥りたるを怪む無し。〔醉經樓集〕卷五答李中丞見羅書

所引の冒頭に示される見解は、若水の「聖學格物通序」の一文に由來し、それを曲解したものである。〔古本は修身を以て格致を釋す〕と把握したのは、高皇帝（太祖）ではなく若水である。が、ともかく「大學は修身を以て要と爲す」との理解も含めてのことであろうが、「數千載不傳」という贊辭を贈ることからも、この「格致」把握を熱烈に支持していることがわかつた。彼が大勢の心學者を向うに回し、「修身」を掲げて對抗しようとしたのは、曲解ではあるが、太祖の御墨付もあるところの『古本大學』の樞要を「修身」とする理解と、當初の實踐の眼目「格致」を「修身」と規定する本文把握の基礎を背景に持つ自信によるものではなかつたか。この書簡は、後に「僞石經本」を熱烈に信奉する以前のものと察せられるが、彼がこの「僞本」を信奉して「修身」を高揚する以前にすでにこのように「古本」の把握によってそれを實踐していたのである。

後半部の「其の義」とは上述の「古本」に對する二點の把握を指すものであるが、「其の義」に通じたものとして評價しながらも新學（心學）の思潮に巻き込まれたものと批判する六人の學者に關しても誤認が少くない。所掲の蔡虛齋（澗・林次崖（希元））については明かに誤認であろうし、羅文恭（洪先）についても明確な資料はない。呂先生即ち呂布石についてはその弟子の伯元のいうことであるから信じてよいかもしれないが、今日傳わる資料では判然としなない。認めうるのは、前述の王布衣（良）、後述する蔣道林（信）のみである。また伯元が若水を擧げないのは不信である。含むところがあるのかもしれないが、若水の把握に對する後學の意識を示すものと見てよからう。この

ような状態では王良にとつて更られたのも蓋し當然かもしれない。さて蔣信は王守仁の教えを受けていることからその學統に連ねられるが、後に若水に従學しているから湛門系の學者とみてよい。結局、湛門系の學者の繼承者は僅か二人である。しかも唐伯元は後に「古本」の立場を放棄して「僞石經本」に走ってしまうのである。一方、蔣信についてはどうであつたらうか。

彼はかつて『古大學義』（『千頃堂書目』卷一）を著しており、その中の所謂「聽訟」の章（四の〔V〕參照）の解釋に次のように言う。

篇首の『此れを本を知ると謂ふ』は、『修身を本と爲す』『本亂れて未治まる』『薄くする所、厚くする所』に即接すること疑ひ無し。格物の義亦た甚だ明かなり。〔大學古今本通考〕卷九蔣道林先生大學義

ここに所引の『修身を本と爲す』の句と以下の二句は、『大學』の本文「自天子」以下「未之有也」までを三分して簡略に記したもので、「此を本を知ると謂ふ」に即接するとするのは、若水の「格致」把握と同一であると見られ、若水直傳のものと言つてよからう。

しかし、この説は彼においては定説とならなかつた。彼は羅洪先に對して「嘗て擯らず『古大學義』を以て呈觀すと雖も、願ふに今は則ち再び正して正を請はざるべからざるに似たり。蓋し『大學』の功夫は全く知止に在り、云云」（『蔣道林先生文集』卷八簡羅念菴內翰）と言ひ、『古大學義』における考えが變化したことを傳える。この書簡には「格致」についての言及はないが、「知止」を第一義の功夫とする旨を主張することから、また上掲の「格致」把握は「格致」を第一義の功夫とすることから導かれるものと考えられることから、この時點において彼は若水由來の「格致」把握を放棄したのではなからうか。

こうなると湛門系の繼承は結局壞滅的狀態に於つたことになるが、最後にもう一例擧げると東林黨の高攀龍がかつて支持者の一人であつた。毛奇齡は次のように言う。

蔡氏乃寔、『禮記模』を刻するに、『註疏』の列に仍照す。此の本は『大學の道』より此（而る后天下平かなり）に至るまでを以て一節と爲すは統起なり。『天子より』より『未だ之有らざるなり』に至るまでを一節と爲すは格致を疏するなり。高忠憲嘗て取りて以て『古本大學』に註す。（『大學證文』卷二）

ここでは「天子より」以下「未だ之有らざるなり」までを「格致」の解釋としたとあつて、「此れを本を知ると謂ふ。此れを知の至りと謂ふなり」の二句については不明であるが、結文と見たのではないか。この註釋の題名は明かでないが、毛氏所言の内容と結文二句に對する臆測を裏づける發言が「古本大學題詞」（『高子遺書』卷三）に見える。

夫れ『此れを本を知ると謂ふ』は必ず『修身を本と爲す』に従ふこと明かなり。『修身を本と爲す』の掲有れば、則ち『此れを本を知ると謂ふ』の結有り。『此れを知ると謂ふ』の結有れば、其の格物致知の釋爲るを知らん。

これはやはり上掲の「格致」把握を示すものと言つてよいと思われが、ここでは續けて「獨り誠意の章の淇澳を引く而下は則ち曲解するも得て通ずべからず」と思つていたと言ふ。ところがある日「崔後渠先生集」見ると次のようにあつた。

大學、當に古本の淇澳以下を撃りて之を誠意の章の前に置くべし。格物致知の義明かならん。

彼はこれを見て、「江河を決することく」意味が通じ、雀躍して崔

銑の校訂に従つた。「淇澳」以下の本文（三の〔I〕〔IV〕參照）を「所謂誠其意」の前に置き、「知本」の解釋と見た。上説は放棄しないものの、「古本」の立場を捨てて所謂「改本」の立場に立つたのである。

上掲の唐伯元、蔣信、高攀龍の轉向は次のことを意味するものである。彼らの初めに従つた「格致」把握は、「古本」流行の當初はそれを正當化する一方法であり、必要なことであつたが、蔣信においてはこれに固執する必要はなく、伯元や攀龍においては「古本」に固執する必要すらなくなつていた。蔣信の場合は「古本」にはすでに傳統の權威や正當性の保證を必要せずに自説を開陳する道が開かれていたことを示すものであろう。また伯元や攀龍の場合は「古本」は『章句』に對抗して自説を開陳するために必要だつたものであつて必ずしも依據しなければならぬテキストではなく、また『章句』の低下にともない依據しなければならぬ時代ではなくなつていたことを示すものであろう（詳細は稿を改めて論ずる）。

四

「古本」は上例の「格致」把握により、その最大の缺陷は一應解決されて、『章句』と對抗する力をつけたが、まだ錯簡や誤字の嫌疑はかけられたままであり、これらを解決しないかぎり、やはり缺陷本のもろしりは免れがたいものであつたらう。湛若水や呂柟等は、錯簡の嫌疑をかけた「所謂誠其意者」以下の本文をいかに考へていたのであろうか。若水においては判然としないが、呂柟については『四書因問』大學によつて明確に理解することが可能である。弟子の問に經文をパラフレーズしながら答える形式は「格致」の場合と同様で、本文把握の仕方を看取できる。

彼は弟子の「其の意を誠にするとは何ぞや」という問いに答えるが、彼の説明は甚だ長文に亘る。この爲以下四段に區切つて紹介するが、さらに冒頭の箇所は割愛した。次の〔一〕として示す本文を「誠意」の傳釋と見るのは諸家の一致する意見で、呂柟もこの例にもれるものでないことは十分首肯されるであらう。事實、彼は次に示す『大學』の本文〔一〕を下敷にし、多少補足しながら説明を試みている。

〔一〕（所謂誠其意者）毋自欺也。如惡惡臭、好好色。此之謂自慊。故君子必慎其獨也。小人間居爲不善、無所不至。見君子而后厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝。然則何益矣。此謂誠於中、形於外。故君子必慎其獨也。曾子曰、十目所視、十指所指、其嚴乎。富潤屋、德潤身、心廣體胖、故君子必誠其意。

呂柟の答えはさらに續いており、それを示すと次のごとくである。彼の淇澳の詩は、君子『切磋琢磨』の功を盡くし、『瑟僩赫喧』の盛を極めて、『盛德至善』の誠に至れば、則ち當世の『民忘るること能はざる』を言ふなり。豈に惟に當世のみならんや。彼の烈文の詩は、前王徳を己に成し、後世の人『類賢樂利』、各々其の所得、『世を没す』と雖も、『忘るること能はざる』を言ふなり。豈に他有らんや。皆な誠意によるのみ。

この答えは次に示す『大學』の本文〔二〕を念頭に置いて「誠（意）」に關係づけたものであり、彼が〔一〕の本文も「誠意」の傳釋として把握していることを示すものである。

〔二〕 詩云、瞻彼淇澳、萋竹猗猗、有斐君子、如切如磋、如琢如磨、瑟兮僩兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諱兮、如切如磋者道學也。如琢如磨者自修也。瑟兮僩兮者恂慄也。赫兮喧兮者威儀也。有斐君子終不可喧兮者、道盛德至善、民之不能忘也。詩云、於戲

明代における『古本大學』顯彰の基盤

前王不忘、君子賢其賢而親其親、小人樂其樂而利其利。此以沒世不忘也。

この箇所は、朱子が「止至善」の「傳」の後半と理解したところであり、學者により様々に理解されるところであるが、彼は「誠意」の傳釋と見たのである。

上引に續く呂柟の答えを示すと次の如くである。故に康誥に言はく、文王『克く徳を明かにす』と。大甲に言はく、成湯『謬の天の明命を顧る』と。帝典に言はく、唐堯、『克く峻徳を明らかにす』と。『皆な自明なり』。此れ至誠の盛徳のみ。然れども誠意の功又た間つべからず。諸を民に施すと雖も、亦た然り。故に盤銘の『日新』、康誥の『新民を作す』、文王の詩の『新命』は、君子、内に己に愧ぢず、外に人に愧ぢず、仰いで天に愧ぢず、其の誠を用ひざる所無くして其の極に造るを言ふなり。是れ何ぞや。誠は人の當に止るべき所、誠ならざれば物無し。故に玄鳥・緝綿の詩、しか云ふなり。然れども能く誠に止まりて入るとして自得せざる無き者は、惟だ文王のみ然りと爲す。故に其の詩は、『緝熙、敬止して』仁敬孝慈信各々其の極に臻るを言ふなり。

この答えも、次に示す『大學』の本文〔三〕を時には轉用し、時には簡略化し、全文に連續性を持たせつつ、「誠（意）」に關係づけたものであり、彼が〔三〕の本文も「誠意」の傳釋として把握していることを示すものである。

〔三〕(a) 康誥曰、克明德、大甲曰、顧諟天之明命。帝典曰、克明峻徳、皆自明。

(b) 湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又新。康誥曰、作新民。詩曰、

周雖舊邦、其命惟新、是故君子無所不用其極。

(c) 詩云、邦畿千里、惟民所止。詩云、緡蠻黃鳥、止于丘隅。子曰、於止知其所止、可以人而不如鳥乎。詩云、穆穆文王、於緡熙敬止、爲人君止於仁、爲人臣止於敬爲、人子止於孝、爲人父止於慈、與國人交止於信。

この本文(a)、(b)、(c)は順に「明明徳」、「新民」、「止於至善」の三綱領の傳釋として朱熹を始め多くの學者に理解されてきたところであるが、彼はこれを「誠意」を傳釋するものとした。

上引に續く呂柟の答えを示すと次のごとくであり、これを以て上掲の弟子の問いに對する答えは終る。

是に於て、孔子は又信に止まるに因りて言はく、「訟を聽くは猶ほ人のごとし。貴ぶに足らざるなり。『必ずや訟無からしめんか』と。蓋し『情無く』して誠ならざる者、其の僞辭を盡すを得ざるは、則ち吾の誠意を以て、大いに其の『志を畏れしめて』人之を信とすればなり。故に曰く、『此れを本を知る』と。

この答をも、次に示す『大學』の本文(Ⅳ)を念頭において、「誠(意)」に關連づけようとしたもので、彼が(Ⅳ)の本文も「誠意」の傳釋として把握していることを示すものである。

(Ⅳ) 子曰、聽訟吾猶人也。必也使無訟乎。無情者、不得盡其辭。大畏民志。此謂知本。

この本文は朱熹が「本來」の「傳」としたもので、後世様々に解されるが、この本文も呂柟は「誠意」を説くとしたのである。

さてこうなると(Ⅰ)を含めて(Ⅱ)~(Ⅳ)までの本文すべてを、「誠意」の傳釋と見たことになる。が、この間の説明はかなり強引に「誠(意)」に關係づけた感を懐かせるものであった。ここには何か

意味があつたのであろうか。

(Ⅰ)~(Ⅳ)までの全文を「誠意」の傳釋として把握すれば、從來かけられてきた錯簡があるのではないかという嫌疑を否定することができる。逆に言えば、この全文を「誠意」の傳釋とする以外それを免れる方法はなかつたのである。(Ⅰ)で示した本文は、「誠意」の傳釋であると萬人に認められるもの、(Ⅳ)で示した本文の後にはすく「正心・修身」の傳釋が待っている。朱熹的な發想を以てすれば、「誠意」と「正心」の間に、他の傳釋を挟む餘地は全く無かつたからである。

またこれに附隨して、(Ⅲ)の本文を「誠意」の傳釋とすれば、三綱領の「親民」は「新民」ではないかとの嫌疑も否定しうるものであつた。この嫌疑は、(Ⅲ)の本文を三綱領の傳釋、とくにその(c)を「新民」の傳釋として把握することに起因するもので、これを「誠意」の傳釋とすればこの嫌疑は立ちどころに消滅する。

(Ⅰ)~(Ⅳ)の本文をすべて「誠意」の傳釋として把握することにより、「古本」の缺陷と見なされた誤字・錯簡の問題も解決することになるが、この把握の仕方は朱熹的な發想に沿つて「古本」を正當化する方法であつたと言つてよいであらう。

因みにこのような「誠意」の本文把握をした注釋を挙げると、著者未詳の『管窺大學古本』(五参照)、李贄作と傳える『說書』、魯睢陽の『大學講』(『大學古今本通考』引、魯氏についてはすべて不詳)があり、許孚遠の『大學述』も最終的には「誠意」を説くとしている。この他、この把握を思わしめる解釋もまだ擧げうる状態で、この「誠意」の把握は明代中期以降もかなり流布したものと言つてよいかもしれない。ところで、このような「誠意」の本文把握は、明代中期になつて始めて現れたものではなかつた。すでに唐の孔穎達によつてなされてい

たのである。略述するに留めるが、彼は『禮記正義』大學篇において、上掲〔一〕〔四〕の本文を「誠意」に結びつけて解釋しており、全體を總括して『所謂誠其意者』、此れより以下『此謂知本』に至るまで、誠意の事を廣明す」と言い切っている。この把握と解釋が、明代の中期以降に與えた影響については判然としないが、上例と無關係でないかもしれない。

この章の最後に觸れておきたいことがある。上述の理解によれば、三綱領の傳釋は「誠意」の中に消失することになるが、この點か問題はなかつたかということである。呂柟はこの點について次のように言う。

格物より以て平天下に至るまで、固より此の三者（明明徳・親民・止至善）を釋すと爲す。而るに設若し又た此の「克明德」以下を取りて之を釋せば亦た復にして亂ならんや。（同上書）

確かに三綱領を解釋したものが八條目とすれば、八條目の詳釋は必要であっても、三綱領の詳釋は混亂の本であり、かえつてない方がよいぐらいであろう。

この呂柟の見解は、自説の「誠意」把握の正當性を裏づけるものとなるが、ここに明代における實踐的な工天重視の傾向を看取することも可能であろう。この把握に従う學者のみならず、三〇既出の崔銑の校訂（『大學全文通釋』）それに従つた高攀龍の場合も、三綱領の傳釋を無視したもので、この傾向を示すものと見てよからう。また「格致」「誠意」はその重要性故に三綱領の「傳」の前に置かれるとする魏校の理解（『大學指歸』）、三綱領を本文の後方に置く季本の校訂（『四書私存』大學）等もこの傾向を示すものとして見ることができよう。

五

呂柟の「格致」と「誠意」についての本文把握の上述のごとくであるが、後の條目についても同様の説明をしており、その本文把握の様子を看取できるものである。すなわち「古本」の順序に沿つてそこに示されるごとく「正心・修身」「修身・齊家」「齊家・治國」「治國・平天下」を傳釋したものと見ている。このことは既述の把握の様子や『四庫提要』の解説からも豫想され、また朱熹を始め諸家の理解とも一致するもので、呂説を引用するのは割愛した次第である。

かくして呂柟によつて「古本」は三綱領・八條目を含む一連の文（經）とその條目の順序正しい傳釋という整合性を持つ形で把握されることとなつた。湛若水は上掲の「格致」の本文把握によつてその脱文の嫌疑を否定し、「古本」の正當性の主張に走つたが、呂柟の場合はこのみではなく錯簡や誤字の問題も解決してその正當性を主張したものである。しかも王守仁的發想によることなく、あくまで朱熹的發想により朱熹と同じ土俵の上で、その完本たることを證明しようとしたものと言つてよからう。呂柟が古本を採用し、顯彰した時期は不明であるが、守仁や若水と同様、その正當性の確立に待つものであつたに違いない。

呂柟は當時多くの弟子を擁した大儒であり、この把握は弟子筋には廣まつたものであろう。またこの把握は「古本」正當化の面からして若水のものより遙かに詳密で十分受容されるに足るものがあり、後世に傳つてこれを支持する發言やこれを基にした注釋の類もあつて然るべしとも思われるが、若水の場合と同様この繼承も慘憺たる情況であつた。

ただ一書、呂説を繼承したと見られる注釋書がある。著者、成立年代ともに不詳の『管窺大學古本』（管窺は人名か、管見の意か不明）である。この書は、『大學古今本通考』（劉斯原編、萬曆三十六年成立）にその「凡例」のみが収録されるところとなり、本文把握の様子を看取することが可能となったものである。その様子は呂柟と全く同一であるが、唯一異なる點は經傳に區別し分章を施している点と見られることである。この書についてはかつて詳述したことがあり、ここで喋々することはないと思われるが、この書の後に附される斯原の批評を検討する中で呂説の後世における意義を見てみよう。

さて、斯原は既述のように『管窺大學古本』の「格致説」が、王良に影響を與えたことと断定している（三三）。しかし、この書を王良が披見したという保證は全くないのである。上述の考察によって知られるように、この説は湛若水や呂柟によって説えられており、また彼らの影響力に鑑みて、ひとりこの書の影響下におくのはあまりに無謀であろう。しかし、この斯原の判断は、『通考』成立當時の状況を物語るものでもあろう。當時この「格致説」を探るものは王良の關係を除けば、この書以外に考えられるものがなかったからに違いない。このことは「古本」とってはすでにこのような本文把握はさして重要な意味を持たず、従って受け継ぐものもなく、同調するものもなかったことを示すものである。

また一方「誠意」の把握に關して斯原は全く觸れることをしないのは、上述のように支持する學者は少くはなく、斯原自身も同様の把握をする學説を採録する（四參照）ことから、特殊なものと寫らなかつたからであらうか。

いずれの場合も斯原がその「古本」正當化の意義を見失っていたこ

とは言うまでもないが、これは彼の不明を責めるべきではなく、當時の状況を看取して然るべきであらう。呂説の後世における扱いは、湛説と同様であり、その正當化において完全、不完全の差はなかつた。正當化そのものが意義を失ってしまったのである。

しかし呂柟や『管窺大學古本』の本文把握は、朱熹と同じ發想の上で「古本」を正當化する唯一の方法であった。この方法は一見、甚だ單純で機械的なものにも寫るものであるが、この中に「章句」によって提示された「古本」の不當性、不完全性の批判を退け、その正當性、完全性を主張する意味が込められていたのである。

結び

以上述べてきたことを概観し、多少の展望を示して結びとしたい。

明代中期、『大學章句』に反發し、『古本大學』の顯彰に務めた學者は、『章句』提出のその缺陷を否定し、その正當性を主張する必要があった。

王守仁は、朱熹が本文を經傳に分けて整合的に把握しようとした立場を批判し、一連の文章としてその全體から理解する立場をとった。これによって朱熹指摘の「古本」の缺陷を否定し、その正當性を主張したが、この際の見解は彼の初期の實踐論と直接結びつくものであつた。この後、彼の解釋は變化するが、「古本」に對する信頼はゆるがなかつた。この態度は後學に引き繼がれ、その正當性を前提にして整合性にこだわらず自在に解釋する道を開くものとなつた。

一方、湛若水は独自の「格致」の本文把握によって「古本」の正當性を主張した。これは朱熹と同様の分析的立場によるもので、「古本」の最大の缺陷とされた「格致」脱文の嫌疑を否定するものであつた。

彼はこの把握の上に自らの學説を築いていった。

この把握は、彼の友人呂柟の取るところでもあったが、意外にも王學左派の王良が受け継ぎ、所謂「淮南格物說」の基盤となった。後には王良獨自のものと認識されるようになっていくが、この間に若水や呂柟については忘れられていった。

若水の本文把握のみでは、朱熹の嫌疑に答えるには不十分であり、朱熹と同じ分析的な立場に立ってさらに錯簡や誤字の問題も解決し、「古本」の完全性を強く主張したものが、呂柟の把握であった。「古本」を正當化する點でまことに有効であったと考えられるこの方法を、後に顧みる者が稀であったのは、「古本」にはすでに正當性の主張を必要としない地位が築かれ、自由に解釋しうる道が開かれていたからであらう。

王守仁、湛若水、呂柟をしてその後學による「古本」の正當性、完全性を主張する流れが合流する中で、「古本」は正當性の主張なくして正當たりうる地盤を築きあげていった。この中でその源泉において不可缺であった「古本」の正當性の保證、その苦心の本文把握の意味は忘れられていく傾向にあったのである。

さて「古本」の正當化の方法が、彼らの實踐論と深く結びついていたことは、ほぼ了解されるであろうが、その成立に直接關つていたことも十分豫想されるものであった。このことは、『章句』の提出した「古本」の缺陷を超克することが、明代思潮の源泉であったことを豫想させるものでもある。

註(一) 『四庫提要』卷八經部四書類『大學管窺』の條に「是の書は首に琴川周木の集むる所の大學古本及び二程・朱子の改本を載せ云云」とあり、

明代における『古本大學』顯彰の基盤

周木(琴川はその號。成化十一年の進士)の「古本」に對する關心はこれによると守仁以前かもしれないが、『大學章句』を批判して「古本」を顯彰した態度とは異なるものであらう。

(2) 彼の「古本」による注釋は『大學億』である。「傳」の雜然たる状態は獨自の意味づけをして正當化したのが、最終的に「傳」の大幅な削除を主張するもので、結局「古本」を正當化するに至らなかった。詳細は拙稿「王順渠の『大學億』について」(『フィロソフィア』六十七號)參照。

(3) 彼の「古本」による注釋は『大學指歸』である。「古本」の順序は逐一意味づけして正當化したのが、「格致」の脱文を認め、「禮記」の樂記の一章によって補うことを主張したもので、結局「古本」を正當化するに至らなかった。詳細は拙稿「魏莊渠の『大學指歸』について」(『東洋の思想と宗教』四號)參照。

(4) 佐野公治氏『四書學史の研究』第三章に詳しい。以下『大學』の「改本」については同上書並びに山下龍二氏『大學・中庸』參照。

(5) 正徳十一年の「與陸元靜」(『王文成公全書』卷四)に「問ふ所の大學・中庸の註は向に嘗て草稿を具へたるも……尋いで已に焚毀せり」とあり、苦心の様子が窺える。

(6) 『傳習錄』上の蔡希淵の「若し先生の舊本に従ふ説の如くんば、即ち誠意は反つて格致の前に在り云云」という問いと、「誠意の工夫は只だ是れ格物致知なり。若し誠意を以て主と爲し、去いて格物致知の工夫を用ふれば、即ち工夫始めて下落有り云云」という守仁の答へは、この信憑性を裏づけるものであらう。

(7) 山下龍二氏『陽明學の研究』成立篇參照。

(8) 嘉靖三年の「與黃勉之」(『王文成公全書』卷五)には「大學古本は曾て下筆の處無し。……然れども此れ亦た自ら徐徐に圖るべし」とあり、本文も改定するつもりであった。

(9) この件に關しては『傳習錄』下陳九川錄によっても確かめられる。

- (10) 『甘泉先生文錄類選』卷十七寄陽明王都憲には十月七日に西樵山に入つたこと、亡った徐愛に寄せる奠文ができたことを記しているが、『横山集』卷六には若水の徐愛に寄せた正徳十二年付の祭文を収めていることから、西樵に入つたのは同年のことと推定される。
- (11) 正徳五年から同六年、若水と守仁はともに北京にいた。守仁の「古本」採用の態度はこの時すでに決定していたと思われ、この時に推疑されている可能性は十分あろう。
- (12) 『明儒學案』甘泉學案一文湛湛甘泉先生若水の條に「時に陽明、吏部に在りて學を講ず。先生と呂仲木之に和す」とある。
- (13) さらに挙げると、『耿天台先生文集』卷九輯聞に羅子(近溪か)の語として所掲の「格致」把握を収録している。また熊竑は「心齋先生は修身を以て格物と爲す。故に其の學は獨り本を立つるを重んず。是の時良知を談じて、間々猖狂自恣の者有り。此の一提撥を得るは功爲る甚だ大なり。故に陽明の門人、先生最も力を得たり。其の後徐波石・趙大洲・羅近溪・楊復所の諸公、皆な此より出で、今に至るまで海内に流播し、火のごと傳はりて盡きず」(『澹園集』卷四十九)という。この理解は多少問題もあるが、注目すべきものである。
- (14) 斯原はその編著『大學古今本通考』の中に上掲の「格致」把握を表す若水の語を収録する。が、その意味するところが理解しかねたのであろう。これは若水の表現が間接的で理解しにくいことに起因しよう。
- (15) この「序」には「伏觀我太祖高皇帝諭侍臣曰、大學一貫、其要在修身。而大學古本、以修身釋格致、曰、此謂知本、此謂知之至也。經文兩推天下國家身心意、皆歸其要於格物、則聖祖蓋深觀古者大學要矣乎」とある。若水は太祖の「大學の要は修身に在り」(出典不詳)という理解が、自身の「修身を以て格致を釋す」とする「古本」の理解と條目の「格物」に歸着するあり方と通することから、太祖の理解を賞賛するものである。唐伯元はこれを誤讀したものであろう。
- (16) 荒木見悟氏『陽明學の展開と佛教』唐伯元の心學否定論には「石經ヲキストの構造は修身に眼目をおく伯元思想の、恰好の代辯者となるものであり、彼が石經を不磨の眞經と信じた理由もそこに存する」とある。
- (17) 蔡清の校訂は、「所謂致知在格物者」を冒頭に補い、「物有……近道矣・「知止……能得」・子曰……知本」を「此謂知之至也」の前に移して「格致」の「傳」とするもの(『四書蒙引』大學)で、林希元もこの校訂に賛同するもの(『四書存疑』大學)である。
- (18) 羅洪先の「與蔣道林」(『念庵文集』卷六)の内容は、高攀龍も「大學廣義」の附録(『高子遺書』卷三)中で「格致」を「缺傳」でないと論じた學者の言として取り挙げるように、所掲の把握に近似するようにも見えるが、判然としない。
- (19) 呂布石の著した『大學辯疑錄』(『大學古今本通考』所引)に「止まるを知りて定まる有り」の二節は致知格物の事、必ずしも傳を補はずして其の義備はる」とあり、また「物に本末有り」の物は下文の格物の物。「本有り」の本は即ち「修身を本と爲す」、「此れを本を知ると謂ふ」の本、「其の本亂れて末治まる者」の本と末は即ち「物に本末有り」の本と末」とある。後者は王良の説に似る。「知止……近道矣」と「自天子……此謂知之至也」を合して「格致」の義としたものであろうか。
- (20) 『洵詞』卷九松窓語旨に同類の文が見える。
- (21) 『道林子大學義』(『四書考異』總考一所引)においては、「曾子曰」の三字(「誠意」の章)の存在を疑問視する。これは、元來「古本」正當化の意識が希薄であったことを示すものであるが、さらには「古本」を否定し、「改本」を作成する學龍の態度にも繋がるものであろう。
- (22) 『甘泉文集』卷二十の「天關精舍講章」においては、所謂「新民」の章について、「新民を説くが如し」とし、さらに「格」に引きつけて解説する。これは呂柟の把握と異なることを示すものであろう(後述参照)。
- (23) 『管窺大學古本』について(『防衛大學校紀要』五十六輯)参照。